

NII YAMAYAMA DA  
新山山田遺跡  
(6区)

— 調査概報 —



財米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書19

新山山田遺跡(6区)調査概報

1996.3

郷土資料

210.2  
Yon  
(19)

1996.3

財団法人 米子市教育文化事業団

# 正 誤 表

ページ	本 文	誤	正
1	例 言	7の下に挿入	8. 挿図中、土器の断面表記は下記の通りである。 弥生・土師器：白抜き 須恵器：ベタ 陶磁器：アミ
2	位置と環境・3行目	面積 <u>100.5</u> km <sup>2</sup>	面積105.71km <sup>2</sup>
2	位置と環境・3行目	人口 <u>134,459</u> 人	人口135,800人
3	図2 新山・陰田遺跡分布図	マノカンヤマ遺跡（ヒジリザコ地区）	ヒジリザコ遺跡
5	図2 新山・陰田遺跡分布図	山田古墳群	山田古墳群（山田遺跡3区）
5	図3 遺構全体図 スケール	0 m <u>40 m</u>	0 m <u>20 m</u>
6	調査の概要・8行目	谷 <u>奥側</u> の・・・	谷奥側の・・・（1字詰める）
6	調査の概要・27行目	須恵器 <u>。</u>	須恵器、・・・
6	調査の概要・27行目	溝状遺構等が <u>築造</u> される。	溝状遺構等が造られる。
6	調査の概要・30行目	段状遺構が <u>築造</u> される。	段状遺構が造られる。
8	遺構について・第1節 竪穴住居・12行目	青木 <u>期</u>	青木区期
14	遺構について・第2節 落とし穴・18行目	再利用されたと考えられる。	再利用されたと考えられるものもある。 。（下線部追加）
19	遺構について・第3節 その他の土坑・10行目	<u>1</u> 層、黒灰色系が <u>5</u> 層である。	2層、黒灰色系が4層である。
20	遺構について・第4節 段状遺構・10行目	P <u>027</u> が出土した。	P <u>028</u> が出土した。
22	遺物について・3行目	ここでは、遺構外・・・	ここでは、主に遺構外・・・
22	遺物について・9行目	(P <u>016</u> ) から (P <u>020</u> )	(P <u>016</u> ) から (P <u>018</u> )
22	遺物について・33行目	TK <u>23</u> ～ <u>47</u> 並行期、陰田 <u>1</u> 期に相当する。	TK 209、陰田5期に相当する。
23	図18 出土遺物実測図		
24	まとめ・2行目	落とし穴 <u>7</u> 基である。	落とし穴 <u>9</u> 基である。

# 例 言

- 1 本書は鳥取県が実施する一般国道180号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概報で、調査概報は平成3年度に『新山 山田古墳群・山田遺跡・研石山遺跡』、平成4年度に『陰田夜坂谷遺跡・隠れが谷遺跡』、平成5年度に『新山遺跡群・奥陰田遺跡群』、平成6年度に『奥陰田遺跡群』、平成7年度に『新山山田遺跡・陰田広畑遺跡』を刊行しており今回が第6冊目となる。
- 2 調査は鳥取県からの委託を受けて(財)米子市教育文化事業団が行った。
- 3 新山山田遺跡6区の調査は、平成7年8月25日から11月24日まで行った。調査面積は1,200m<sup>2</sup>である。
- 4 図中の方位は真北、レベルは海拔標高、X、Yの座標値は国土座標第V系の座標値である。
- 5 遺構等の名称や内容は調査時に慣用したものに基づく。調査・整理は継続中であり、今後本報告書作成の過程で部分的に見直す可能性もある。
- 6 本文の執筆・編集は深田洋史(米子市教育文化事業団調査員)が行なった。
- 7 調査報告書は、新山分と奥陰田分を分冊で作成し、平成5年度に新山分を刊行した。奥陰田分(平成6年度以降の新山調査分も含む)は平成9年度に刊行する予定である。

## 目 次

位置と環境	2
調査の概要	6
遺構について	8
遺物について	22
ま と め	24

## 挿 図

図1	位置と周辺の遺跡
図2	新山・奥陰田遺跡分布図
図3	遺構全体図
図4	SI01出土遺物
図5	SI01遺構図
図6	SI02出土遺物
図7	SI02遺構図
図8	SI03出土遺物
図9	SI03遺構図
図10	SI04遺構図
図11	SK01・02遺構図
図12	SK03・04遺構図
図13	SK07・08・09遺構図
図14	SK10・14遺構図
図15	SK05・06・11遺構図
図16	SS01・02遺構図
図17	SB01・02・03遺構図
図18	出土遺物実測図

## 図版目次

図版1	調査地全景・竪穴住居跡(SI01)図
図版2	竪穴住居跡(SI02)
図版3	竪穴住居跡(SI03・04)
図版4	落とし穴(SK01・02・03)
図版5	落とし穴(SK04・07・08・09)
図版6	落とし穴(SK10・14)・段状遺構(SS01)
図版7	出土遺物(Po02・Po06・Po28・Po29)
図版8	調査の風景

# 位置と環境

## 第1節 地理的環境

米子市は、鳥取県の最西端に位置し、面積100.05km<sup>2</sup>、人口134,459人の商工業都市である。北西は境港市、北は日吉津村、東は淀江町、南東は大山町、南は岸本町、会見町、西伯町、南西は鳥根県伯太町、西は鳥根県安来市と接している。

地形は米子平野を中心に、日本海に面する北部には砂浜海岸、日本海と中海に囲まれた北西部に弓浜半島、東部から南部、西部の周縁部の大山山系から続くなだらかな山地、丘陵から構成されている。市北西部に面している中海は面積98.1km<sup>2</sup>の潟湖で、大橋川を通じ宍道湖と繋がっている。

調査地の新山は、米子市南西部に位置し、鳥根県能義郡伯太町に接する県境の集落である。米子市街地を流れる加茂川は新山に源を発し、集落内を東に向け流れる。集落内の大部分を山地が占めるが、加茂川沿いに平野が開け、水田として利用されている。加茂川と並行して山麓に萱原、酒家側、豆腐屋等の小字が並ぶ。

加茂川に並行して県道米子広瀬線が通る。このルートは古代山陰道のルートととして考えられていたり、安来市にある清水寺参詣道であったことから、古来より利用されていた交通路であると考えられる。

このような地勢のため、米子市南部と安来市、伯太町では、古来より県境（雲伯国境）を越えての交流は盛んであり、現在も婚姻関係等地域的な結びつきが強い傾向がみられる。

また、国境に接していたため、戦国時代の永禄6～9（1563～1566）年に新山城が要害山（281m）に築城された。酒家側、豆腐屋等の小字名は戦国新山城下町の名残りであるとされている。

産業の中心は農業で、米が販売作物の中心になっている。農作業機械化による余剰農業力の発生と、集落内を県道米子広瀬線が通過することにより就業機会が確保されていることから、第2種兼業農家の割合が高い。

## 第2節 歴史的環境

### 縄文時代

草創期は大山山麓や奈喜良遺跡（22）で有舌尖頭器が出土している。早期になると上福万遺跡で押型文土器、撚糸文土器が出土している。

前期から中期では、集落の形成は台地上だけでなく低湿地にもみられるようになる。目久美遺跡（4）では貝殻条痕文土器や貯蔵穴、陰田第9遺跡（13）では押引沈線文土器が、陰田第1遺跡（16）では人為的な痕跡の認められる獣骨が出土している。

後期から晩期では、低湿地に引き続き集落が営まれるのに加え、丘陵地にも遺跡の形成がみ

られるようになる。青木遺跡（24）では、250基の落し穴群が検出された。落し穴群は、尾高御館山遺跡（7）、東宗像遺跡（10）、新山山田遺跡（20）や陰田隠れが谷遺跡（19）でも検出されていて、新山、奥陰田の遺跡群の形成が始まる。

### 弥生時代

前期には、低湿地の目久美遺跡、長砂第1遺跡（6）、口陰田遺跡（11）で微高地に集落、低湿地に水田が形成される。

中期になると丘陵地でも集落の形成がみられる。青木遺跡は奈良時代まで続く大規模な集落である。低湿地遺跡も引き続き営まれ、目久美、池の内遺跡（5）から水田が検出されている。

後期になると、斜面部や山頂部に集落が形成される。陰田隠れが谷遺跡や陰田第6遺跡（14）では斜面をテラスに加工し、そこに集落が形成されていた。また、尾高浅山遺跡（9）は環濠に囲まれる集落と四隅突出型墳丘墓が存在する遺跡である。

### 古墳時代

前期の古墳に、一辺20mの方墳の日原6号墳がある。集落では福市遺跡、青木遺跡、陰田第6遺跡、陰田隠れが谷遺跡、陰田広畑遺跡等がみられる。

中期になると陰田1号墳（17）、陰田41号墳（14）、集落は福市遺跡（23）青木遺跡等がみられる。

後期になると横穴墓が集中する陰田横穴墓群（15）、横穴式石室が集中する宗像古墳群、東宗像古墳群にみられるように多くの群集墓の形成がある。集落は福市、青木、新山、陰田等米子平野を囲む丘陵に形成される。陰田隠れが谷遺跡から雌雄の土馬が出土している。

### 歴史時代

陰田広畑遺跡（18）で、奈良時代の鍛冶炉が検出されている。製鉄・鍛冶関連遺跡は、安来市の徳美津遺跡（26）や五反田遺跡（27）陰田荒神谷遺跡（12）等でも確認されており、伯耆・出雲の国境を越えた製鉄・加工の一大生産地であったことが伺える。

錦町第1遺跡（1）では黒砂層から平安から鎌倉時代の畠跡が検出された。黒砂層は旧鳥取街道に沿うかたちで東に延びる。鎌倉期に造成された深田氏庭園（2）もその延長線上にあるので、黒砂層上に集落の形成が伺える。

戦国時代になると、尾高城（8）、新山城（25）、橋本城（28）等が築かれる。

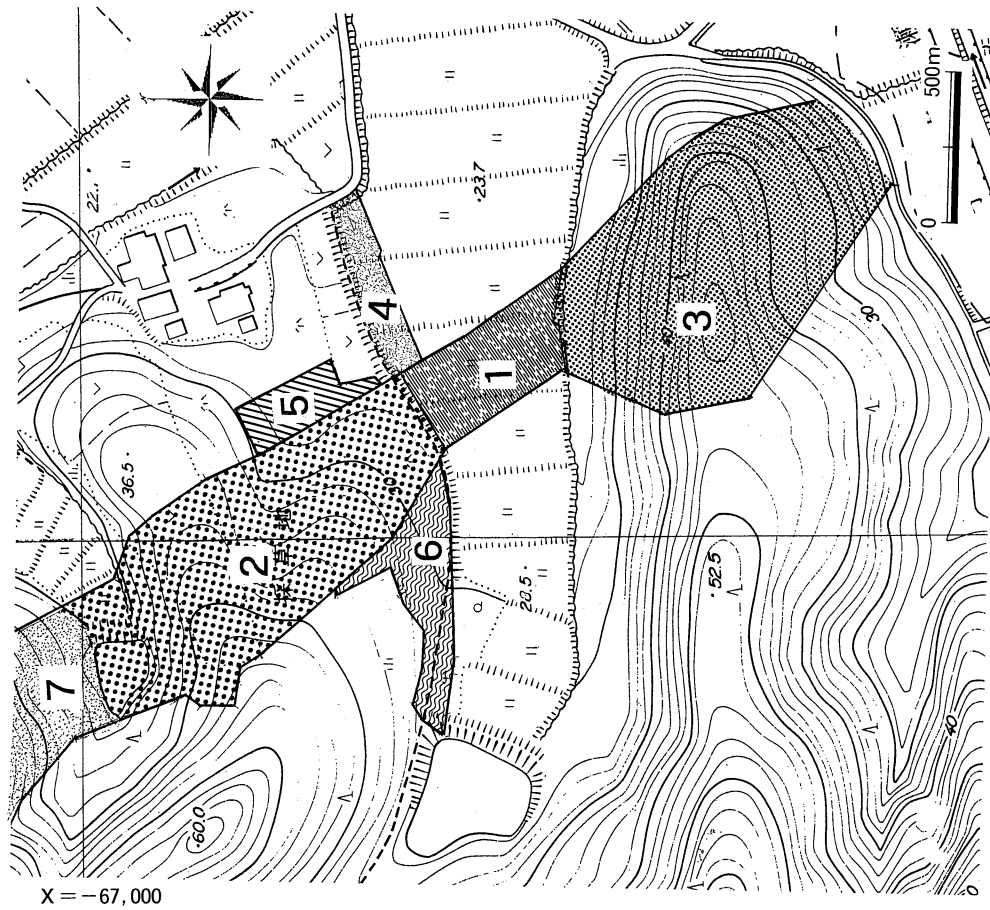
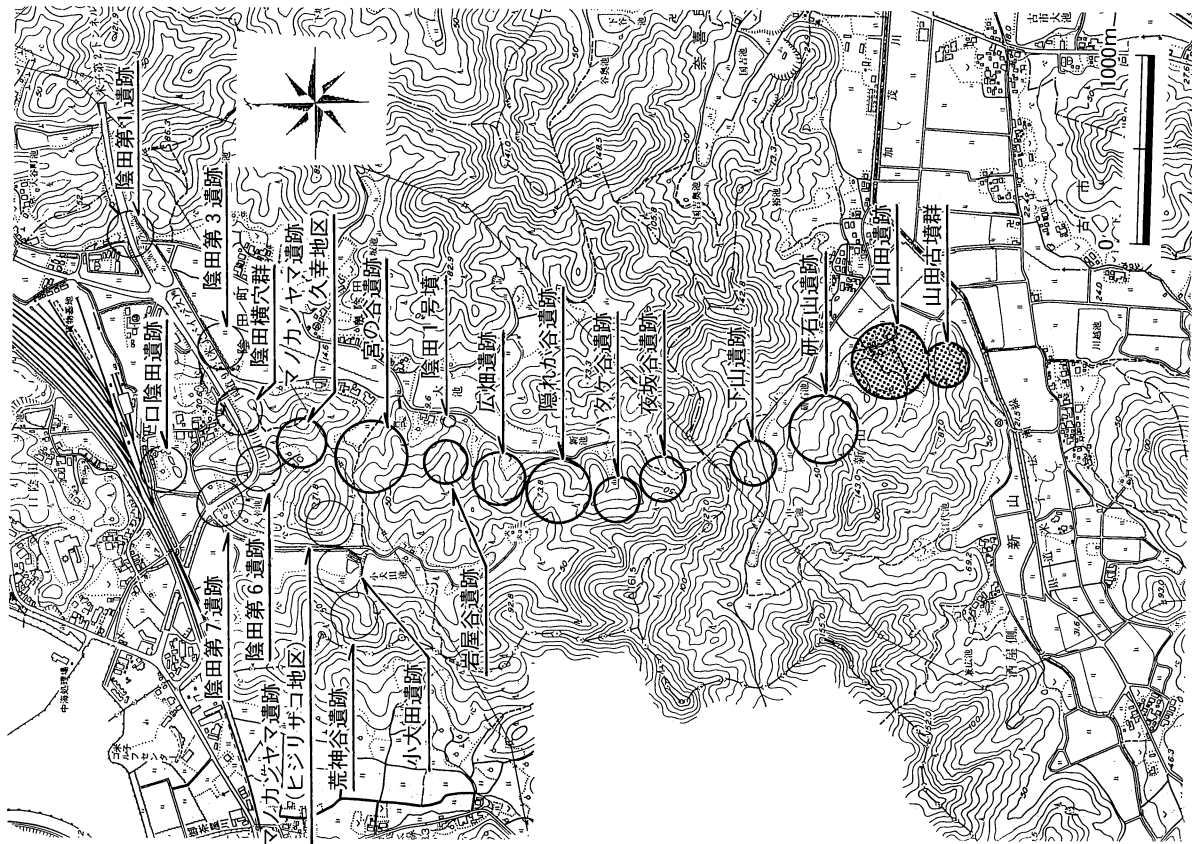
江戸時代に米子城（1）が築城され、城下町が形成される。

明治維新後、調査地域は新山村となり鳥取県に所属、明治9（1876）年に島根県に所属したが、同14（1881）年に再び鳥取県に所属し、同22（1889）年に成実村の大字になり、昭和29（1954）年に米子市の大字になり現在に至る。



図1 位置と周辺の遺跡 (国土地理院 1:50000地形図米子より作成)

1	錦町第1遺跡	2	深田氏庭園	3	米子城	4	目久美遺跡
5	池の内遺跡	6	長砂第1遺跡	7	尾高御館山遺跡	8	尾高城
9	尾高浅山遺跡	10	東宗像遺跡	11	口陰田遺跡	12	陰田荒神谷遺跡
13	陰田第9遺跡	14	陰田第6遺跡	15	陰田横穴墓群	16	陰田第1遺跡
17	陰田1号墳	18	陰田広畑遺跡	19	陰田隠れが谷遺跡	20	新山山田遺跡
21	日原6号墳	22	奈喜良遺跡	23	福市遺跡	24	青木遺跡
25	新山城	26	徳見津遺跡	27	五反田遺跡	28	橋本城



- 1. 山田遺跡1区
- 2. 山田遺跡2区
- 3. 山田遺跡3区
- 4. 山田遺跡4区
- 5. 山田遺跡5区
- 6. 山田遺跡6区
- 7. 研石山遺跡

図2 新山・奥陰田遺跡分布図

# 調査の概要

## 調査の原因と経過

本調査は、鳥取県が実施する一般国道180号（米子バイパス）道路改良工事による交差農道拡張・改良工事に伴うものである。交差農道は、国道本線部を東西に直行する形で計画されていて、延長約200mである。

新山地内の交差農道の拡張予定地は、平成元年度から平成2年度の山田遺跡の発掘調査地に隣接する場所であることから、遺跡の存在が予想された。

交差農道拡張工事に伴う山田遺跡の調査は、前年度に水田部500m<sup>2</sup>（4区）を調査していて、中世の井戸と掘立柱建物を確認した。今年度は道路（国道本線）部分をはさんで谷奥側の南東向き斜面1,200m<sup>2</sup>（6区）の調査を実施した。重機により表土を掘削した後、素掘りにより徐々に掘り下げることにより、遺構を探した。

## 新山山田遺跡の概要

国道180号道路改良工事に伴う新山山田遺跡の調査は平成元年度に実施されている。新山山田遺跡は、標高25～50mの低位丘陵上に位置する2区、谷を隔てほぼ同じ標高の低位丘陵上に位置する3区（山田古墳群）、両区を隔てる谷部の1区から成る。

1区からは、自然流路跡とピット群、土器溜、敷石等の遺構、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、ミニチュア土器、紡錘車等の遺物を検出した。これらより、人工的な水管理が行なわれていたこと、また古墳群を仰ぎ見る位置と土器溜や祭祀遺物より生と死を意識した祭祀場として位置付けがなされていたと考えられる。

3区からは、古墳時代中期から後期にかけての古墳が8基、横穴墓が1基検出されている。横穴墓は古墳時代後期後葉に築造され、後背墳丘と石棺を有する特徴がある。出土遺物には、円筒埴輪、珠文鏡、須恵器、鉄刀等が検出されている。また、白鳳～平安期には1区に向けての斜面にテラスが築造され、鍛冶路を伴う掘立柱建物跡が検出された。遺物は、鉄滓、U字状鋤先、須恵器杯、甕破片等が検出された。

2区からは、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、段状遺構、土坑、ピット群等の遺構を、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、分銅型土製品を検出した。縄文時代は谷に向かって降りるように落とし穴が造られる。集落の形成は弥生時代中期後葉から始まり、竪穴住居、溝状遺構等が築造される。集落は古墳時代後期前葉で消滅し、その跡地に古墳が築造される。古墳時代末期から奈良時代にかけて集落は再び形成され、掘立柱建物、段状遺構が築造される。また、平坦地と道状・階段状遺構等を検出した。明治期に合祀廃絶された神社跡と考えられ、平坦地は社殿跡地、道状・階段状遺構は参道と考えられる。

今回の調査地（6区）は、2区の西側に隣接し、標高25～40mの低位丘陵状に位置する。



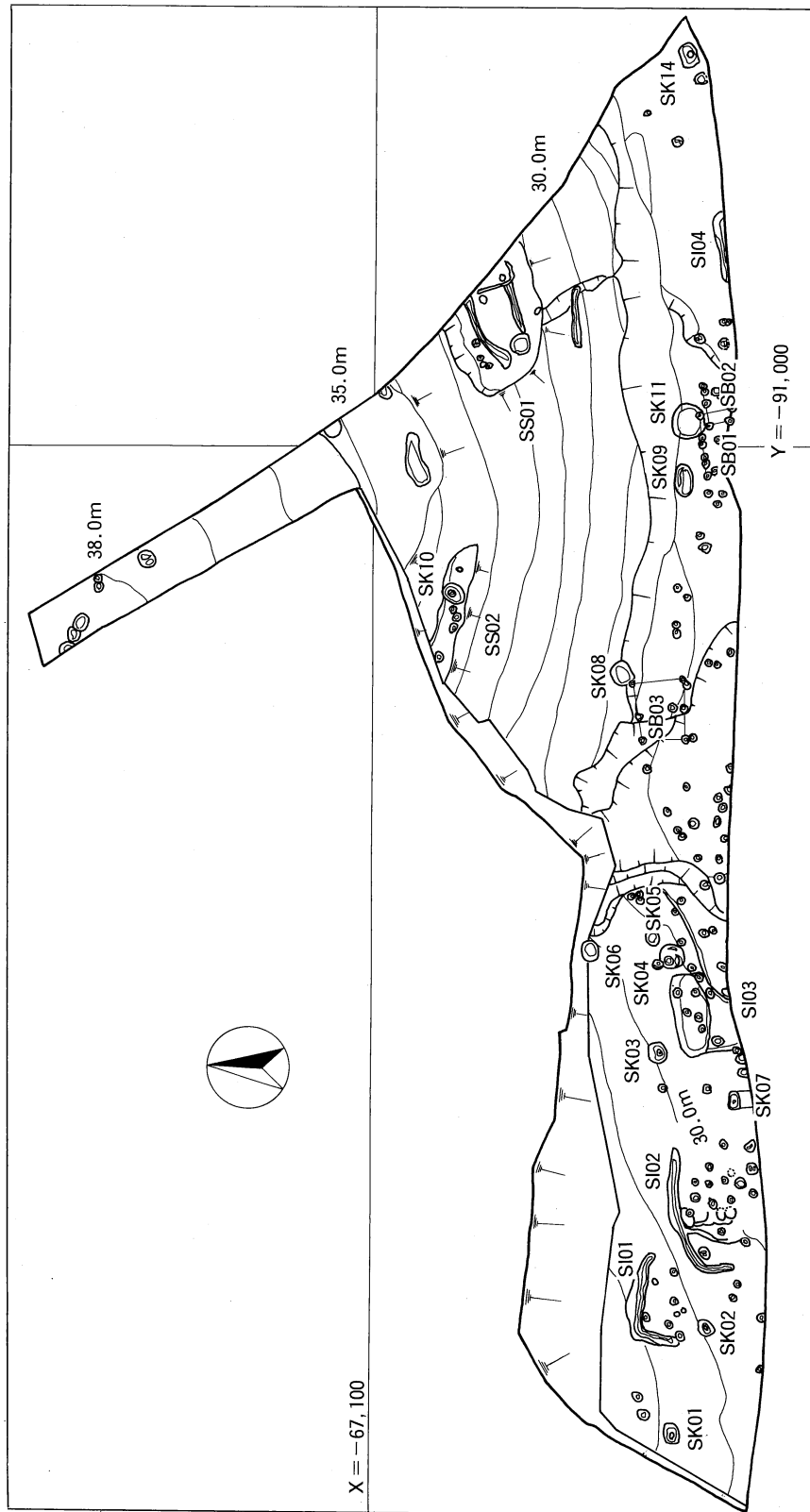


図3 遺構全体図

# 遺構について

調査地は、北東に向かい延びる丘陵上にある。今回の調査で、竪穴住居跡4基、土坑15基、掘立柱建物跡3棟、ピット89基を確認した。

## 第1節 竪穴住居跡（S I）

S I 01 （挿図4、5 図版1、7）

位置 調査区の西側、標高31.30mに位置する。

形態 隅丸方形で、残存規模は南北1.90m、東西4.10m、壁高0.87mである。南東半分は流出している。側溝は、幅0.25m、深さ0.15mである。ピットは8基確認した。

埋土 埋土は17層に分層でき、自然堆積したものと考えられる。

遺物 床面より、土師器の高坏（Po03）、甕口縁（Po01）、埋土中より甕（Po02）が出土した。Po01、Po03は青木期に相当する。

時期 住居の形態、出土遺物より古墳時代中期末～後期初頭と考えられる。

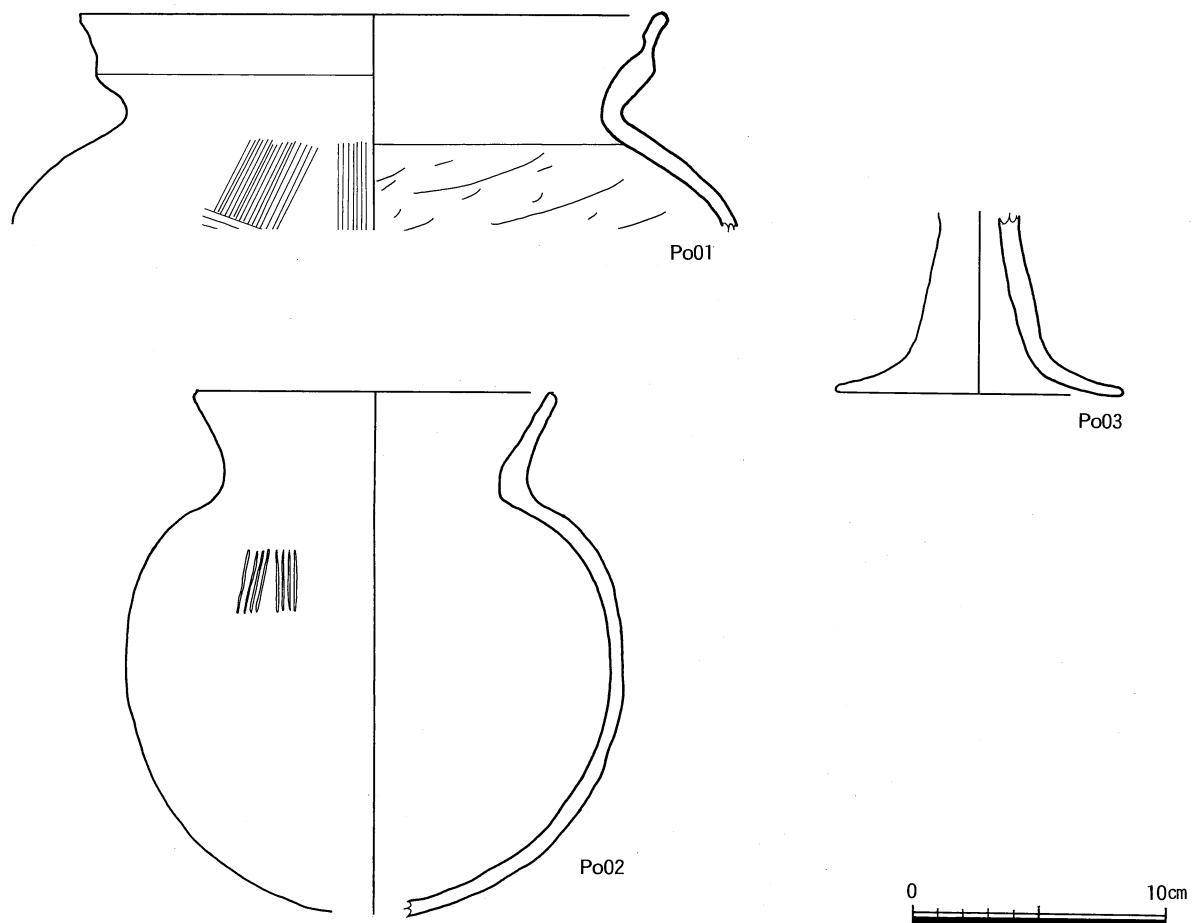


図4 S I 01出土遺物

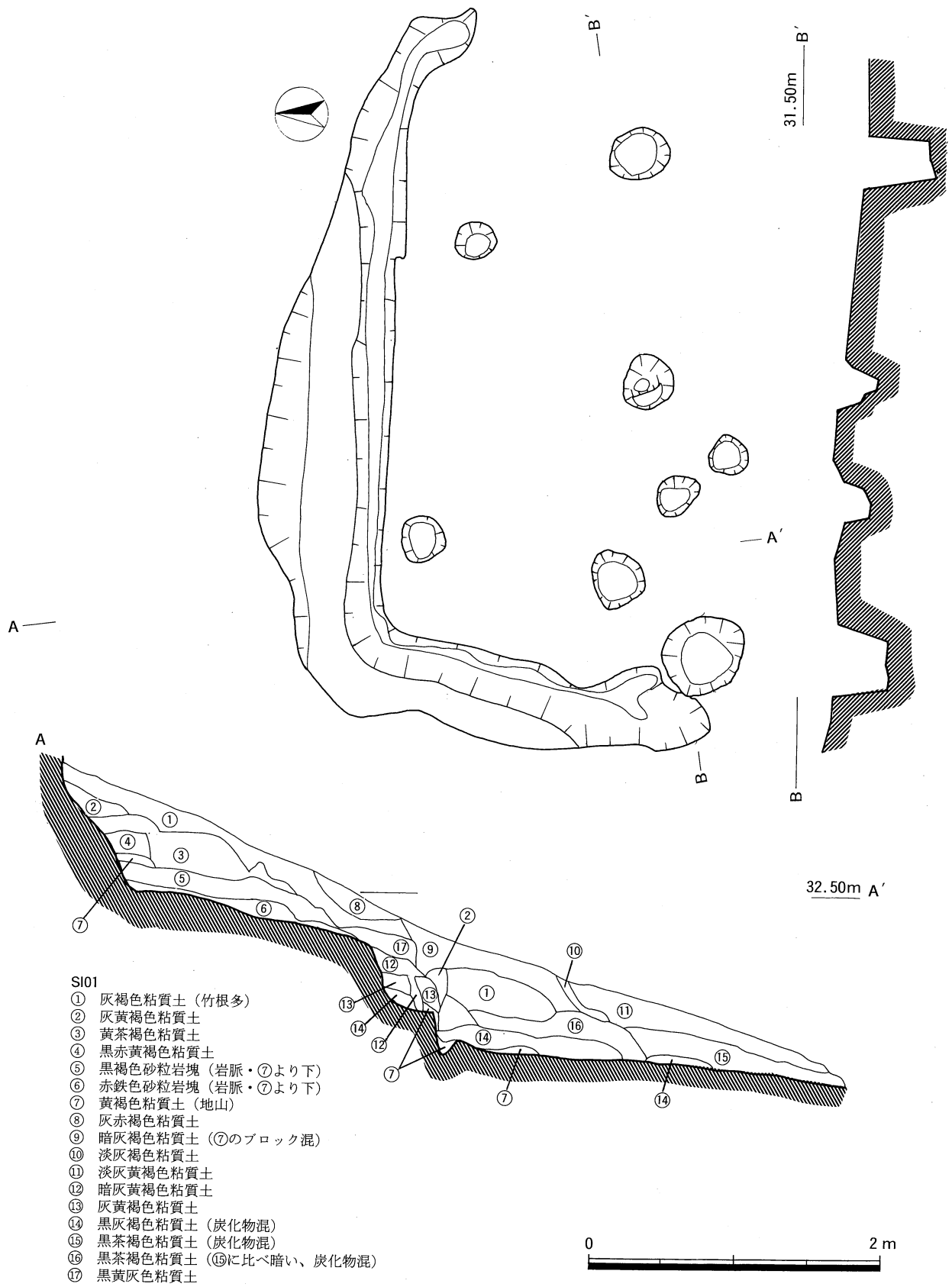


図5 S101遺構図

**S 102** (挿図6、7 図版2、7)

位 置 調査区の南西、標高30.0mに位置する。

形 態 円形で、残存規模は南北4.50m以上、東西6.80m、壁高0.57mである。南側は調査区外となる。側溝は幅0.40m、深さ0.15mである。

中央ピット (S X02・03) を検出した。S X02・03ともほぼ円形で、規模はS X02で0.5×0.5-0.5m、S X03で0.6×0.5-0.2mを測る。埋土は黒褐色3層に分層でき、炭化物を含む。S X02より弥生土器甕Po04が出土した。青木Ⅲ期に相当する。住居北壁際より集石伴うを焼土面S X4が検出された。この下よりピットを検出した。

埋 土 12層に分層でき、①は現代の堆積である。

遺 物 弥生土器、土師器、石器が出土している。Po05は弥生土器の壺か甕の底部で、ピット内から、Po06は埋土中より出土した。Po06は青木Ⅶ期に相当する。

時 期 出土した土器と住居の形態から弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる。

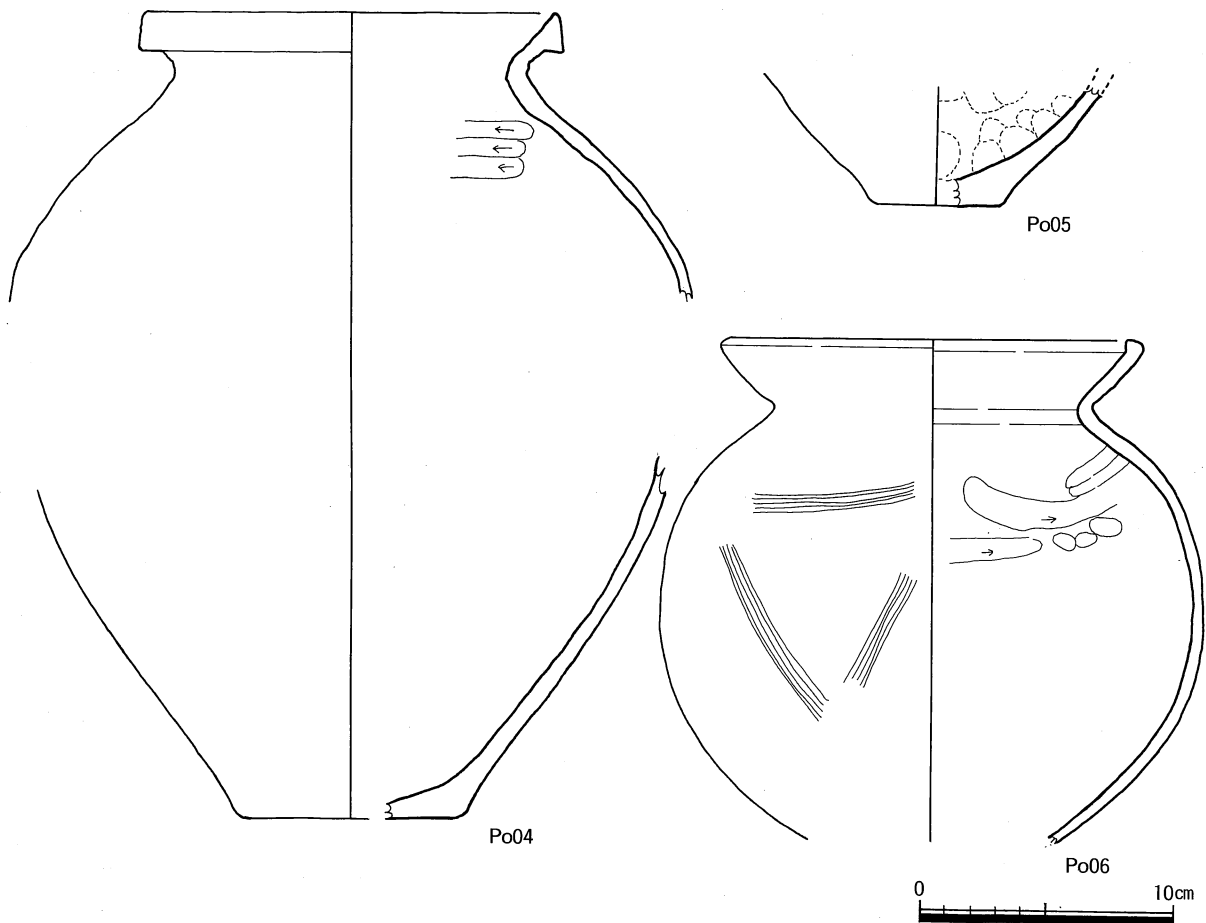


図6 S 102出土遺物

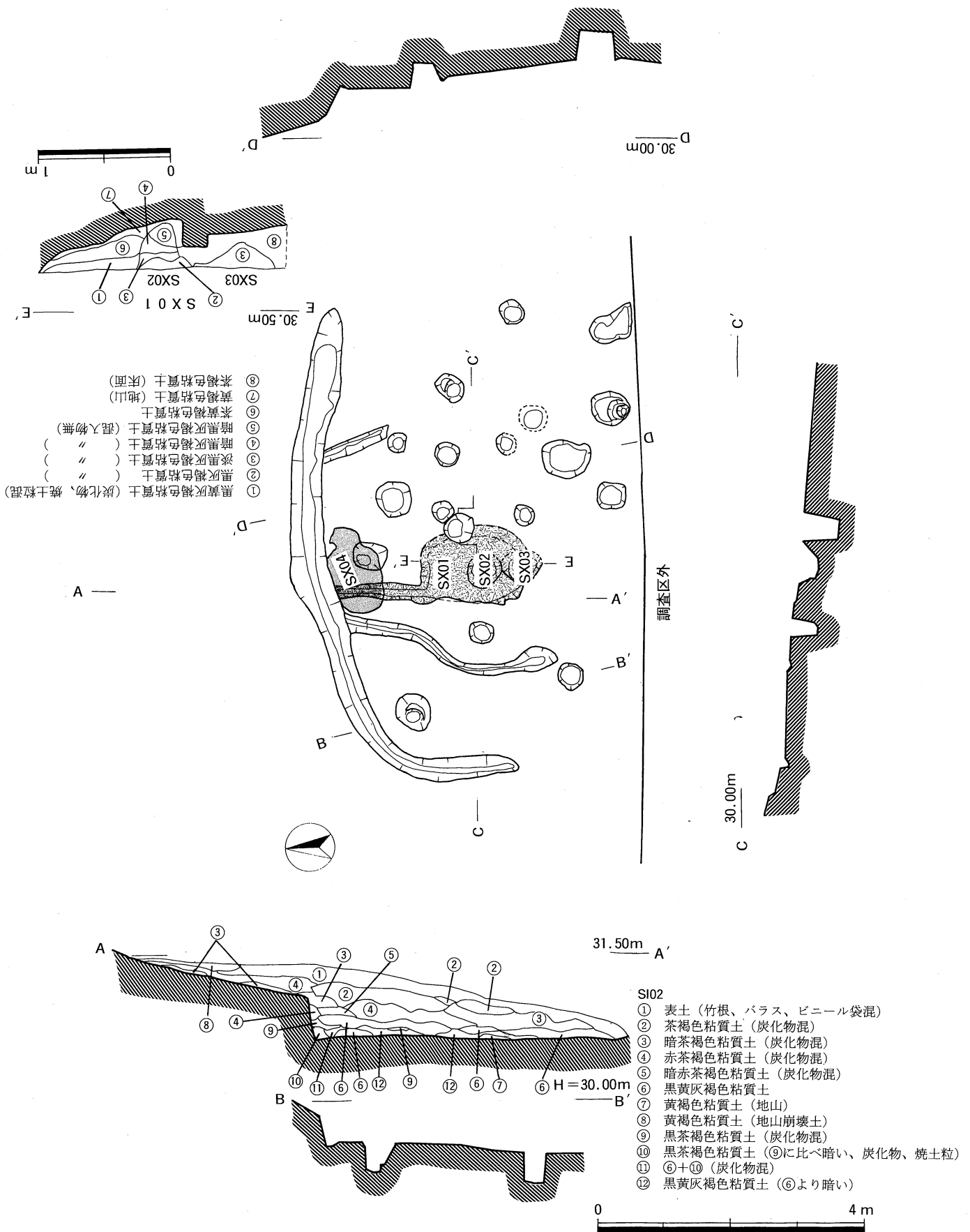


図7 S102遺構図

**S I 0 3** (挿図8、9 図版3)

位 置 調査区の南部、標高28.80mに位置する。

形 態 隅丸方形で、残存規模は南北4.15m、東西2.90m、壁高0.42mである。側溝は検出できなかった。住居内に焼土塊S X 05が検出され、この高さが生活面であると考えられる。北側半分は南側に比べ約0.1m下がっている。原因は不明だが、後世の攪乱のためと考えられる。

埋 土 埋土は6層で、自然堆積したものと考えられる。

遺 物 弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。Po07は須恵器坏身で、陶邑TK 208に該当する。Po08・09は須恵器坏蓋、Po10は須恵器坏身でTK 23~47並行期に相当する。Po12は土師器坏身で口縁部が内湾する。青木IX期に相当する。

時 期 出土した土器、住居の形態より、古墳時代中期末~後期初頭と考えられる。

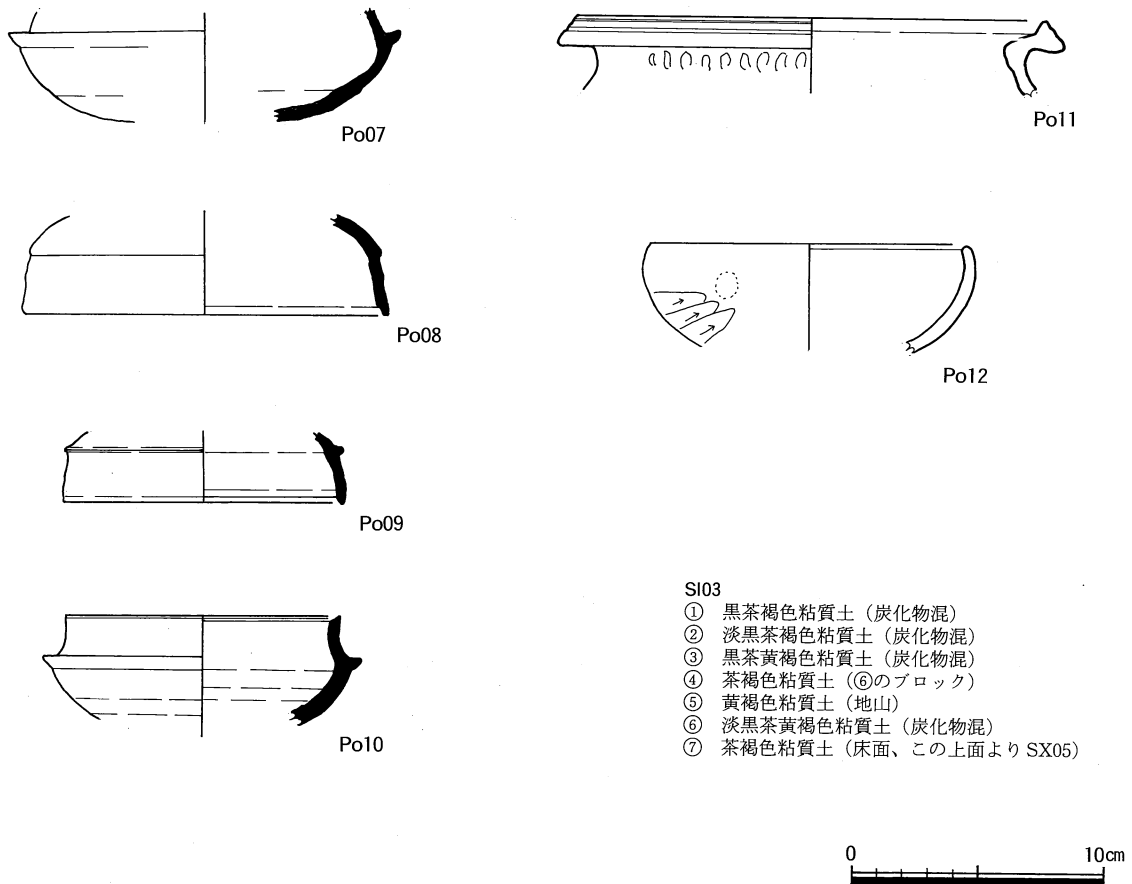


図8 S I 03出土遺物

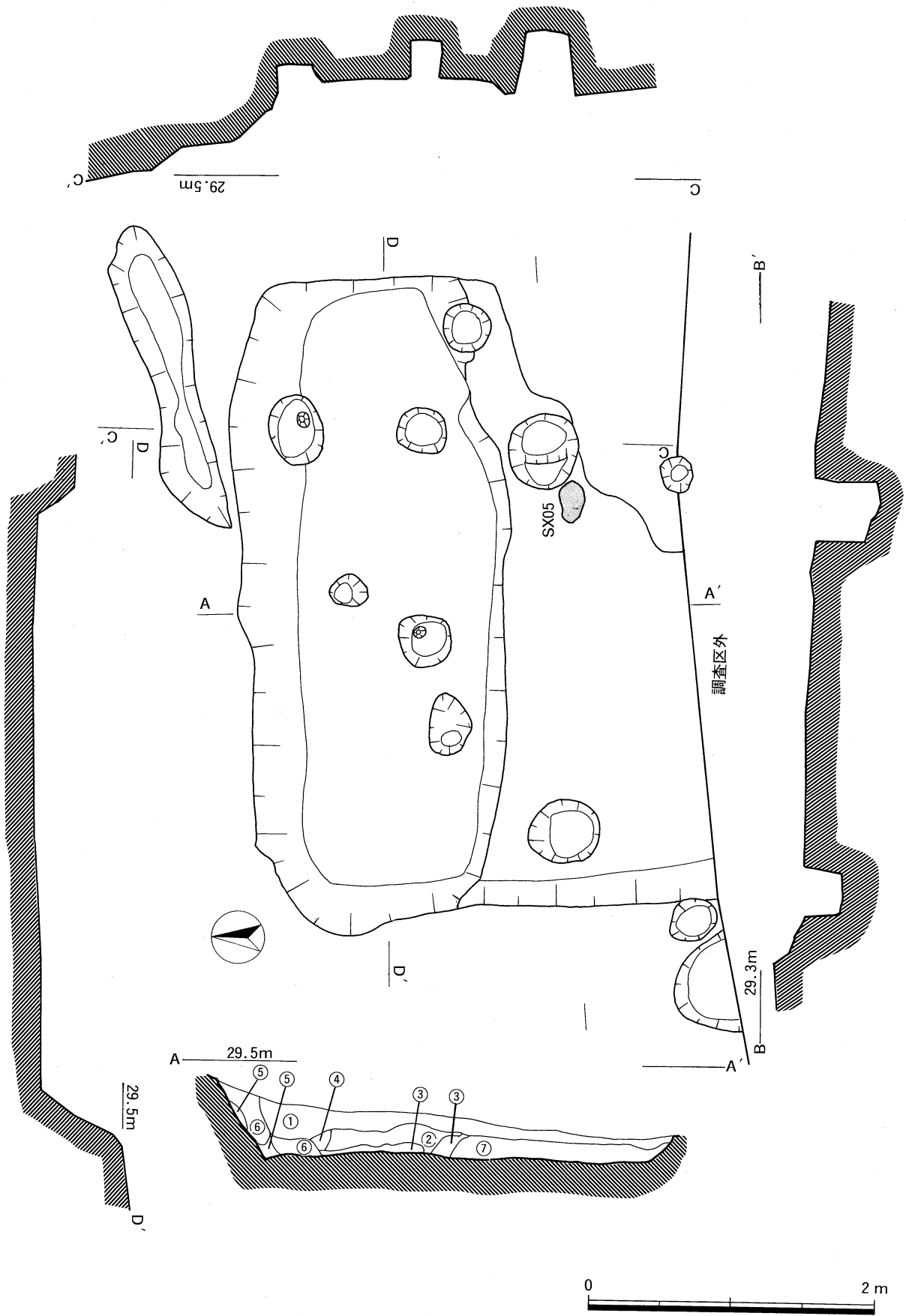


图9 S I 03遺構図

**S I 04** (挿図10 図版3)

位置 調査区東部、標高26.3mに位置する。

形態 隅丸方形で、残存規模は、南北0.35m以上、東西2.80m以上、壁高0.23mである。側溝は幅0.30m、深さ0.40mである。住居の南側は調査区外である。

埋土 埋土は7層に分層でき、①は農道造成時に人為的に盛られたものである。下2層は自然堆積したものと考えられる。

遺物 土師器が側溝内より出土した。いずれも小片で実測可能なものは無かった。

時期 出土した土器、住居の形態より、古墳時代中期末～後期初頭と考えられる。

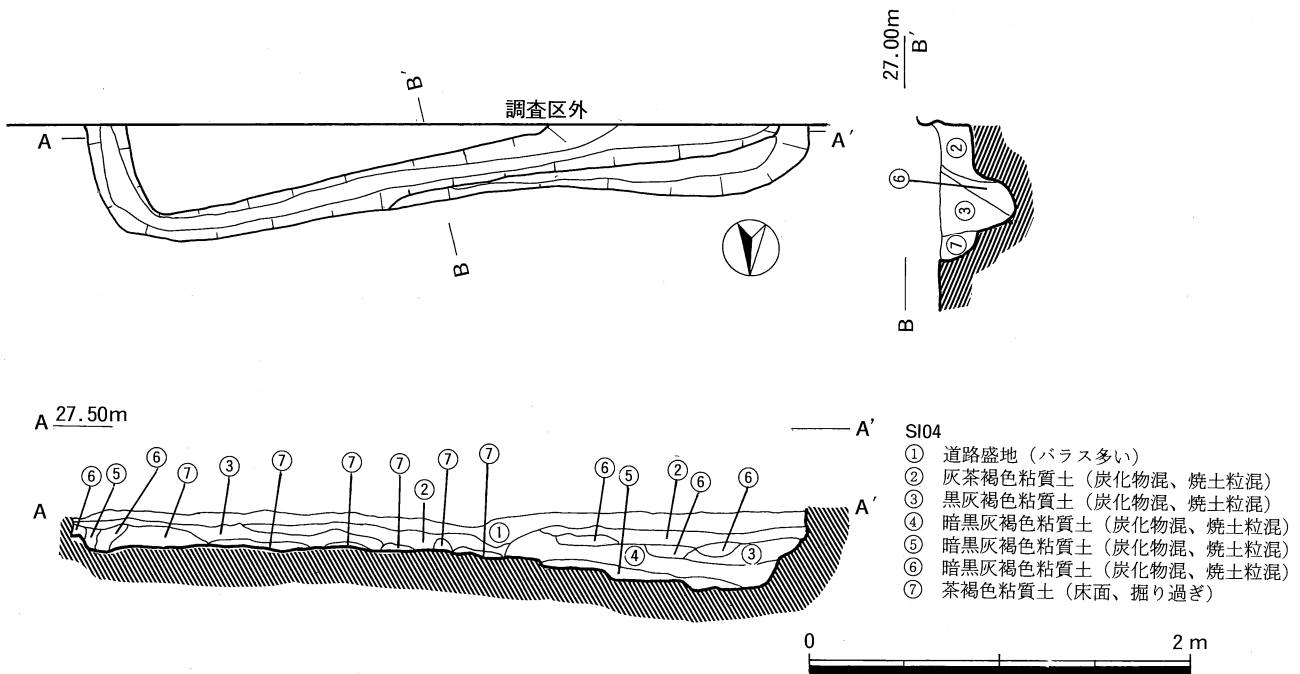


図10 S I 04遺構図

## 第2節 落とし穴 (SK)

当遺跡から土坑は15基検出された。そのうち9基が、落とし穴と考えられる。検出面で隅丸長方形、長楕円形、円形の形態を示し、2基を除いて底面にピット（以下底面ピットとする）を有する。底面ピット周辺や底に杭を支えるためのものと思われる石組を検出したものもある。

落とし穴は、谷状地形になっている調査区中央部に向かって降りる斜面上に分布している。谷に向って動物を追い込む狩猟法が行なわれていたとするなら、SK01とSK02、SK03と04、SK10とSK08という組み合わせが考えられる。

埋積状況は、自然堆積したと考えられるものが多いが、SK01でみられるように固定土状の埋土がみられるのもあり、人為的に埋められ再利用されたと考えられる。



**SK01** (挿図11 図版4)

位置 調査区西部、標高32.0mに位置する。

形態 隅丸長方形で、残存規模は検出面で長辺1.15m、短辺0.86m、深さ0.80m、底面で長辺0.95m、短辺0.65mである。底面に直径0.30m、深さ0.25mの底面ピットがある。

土層 埋土は、14層に分層できる。底面上の⑩、⑪の埋土の形態から、一度人為的に埋めて使われたと考えられる。⑫は杭の痕跡と考えられる。

遺物 底面ピットを覆う形で自然礫2個、底面ピット底部に自然礫1個が出土した。これらは、杭を支えるために使われたものと考えられる。

性格 底面ピットの存在から、落とし穴と考えられる。

時期 土坑の形態から縄文時代中期から後期と考えられる。

**SK02** (挿図11 図版4)

位置 調査区西部、標高31.0mに位置する。

形態 長楕円形で、残存規模は検出面で長辺1.15m、短辺0.85m、深さ0.40m、底面で長辺0.60m、短辺0.35mである。底面に直径0.25m、深さ0.35mの底面ピットがある。

土層 埋土は、7層に分層できる。

遺物 出土しなかった。

性格 底面ピットの存在から、落とし穴と考えられる。

時期 土坑の形態から縄文時代中期から後期と考えられる。

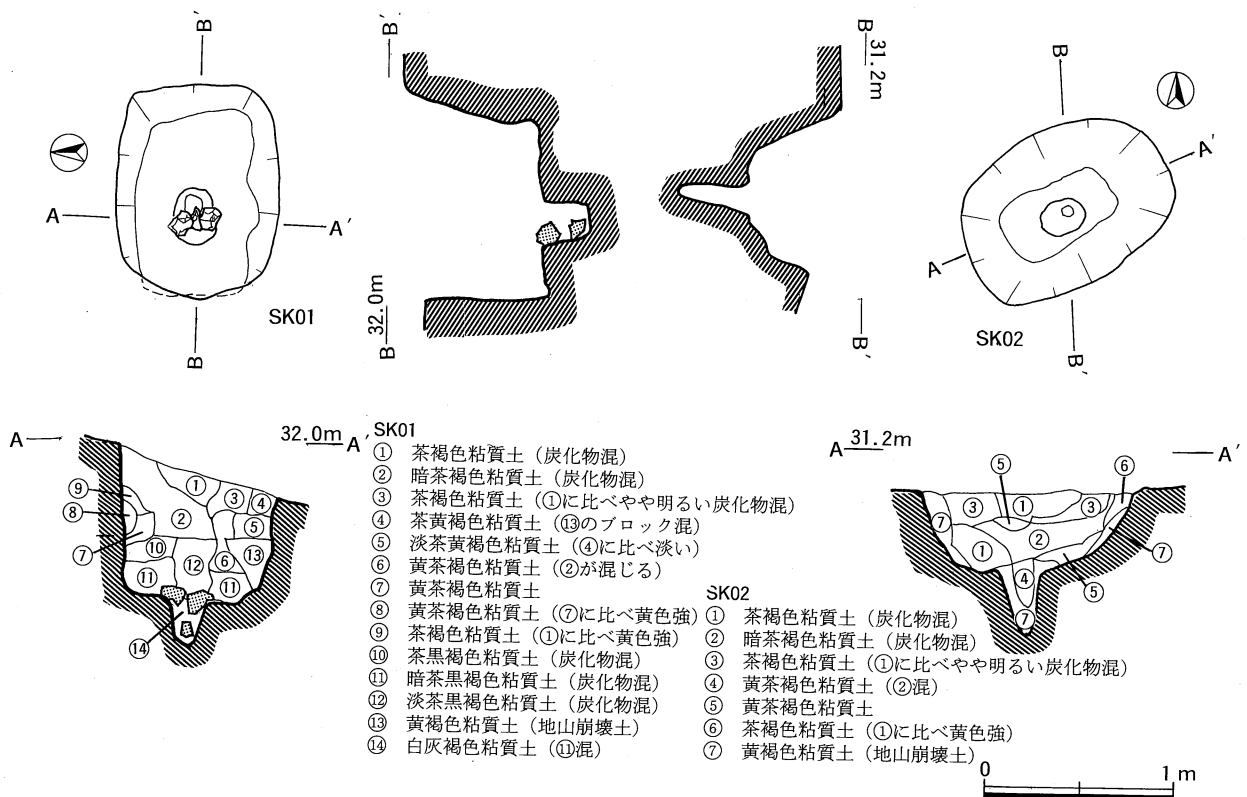


図11 SK01・02遺構図

**SK03** (挿図12 図版4)

位置 調査区中央部、標高30.0mに位置する。

形態 長楕円形で、残存規模は検出面で長辺1.10m、短辺1.00m、深さ0.45m、底面で長辺0.85m、短辺0.60mである。底面に直径0.30m、深さ0.40mの底面ピットがある。

土層 埋土は、6層に分層できる。

遺物 出土しなかった。

性格 底面ピットの存在から、落とし穴と考えられる。

時期 土坑の形態から縄文時代中期から後期と考えられる。

**SK04** (挿図12 図版5)

位置 調査区中央部、標高29.2mに位置する。

形態 円形で、残存規模は検出面で長辺14.0m、短辺13.0m、深さ0.85m、底面で長辺0.85m、短辺0.55mである。底面に直径0.20m、深さ0.20mの底面ピットがある。ピット12と重複する。

土層 埋土は、17層に分層できる。

遺物 底面ピットを覆う形で自然礫4個、底面ピット底部に自然礫4個が出土した。これらは、杭を支えるために使われたものと考えられる。

性格 底面ピットの存在から、落とし穴と考えられる。

時期 土坑の形態から縄文時代中期から後期と考えられる。ピット12との新旧関係は、埋土よりSK04が古いと考えられる。

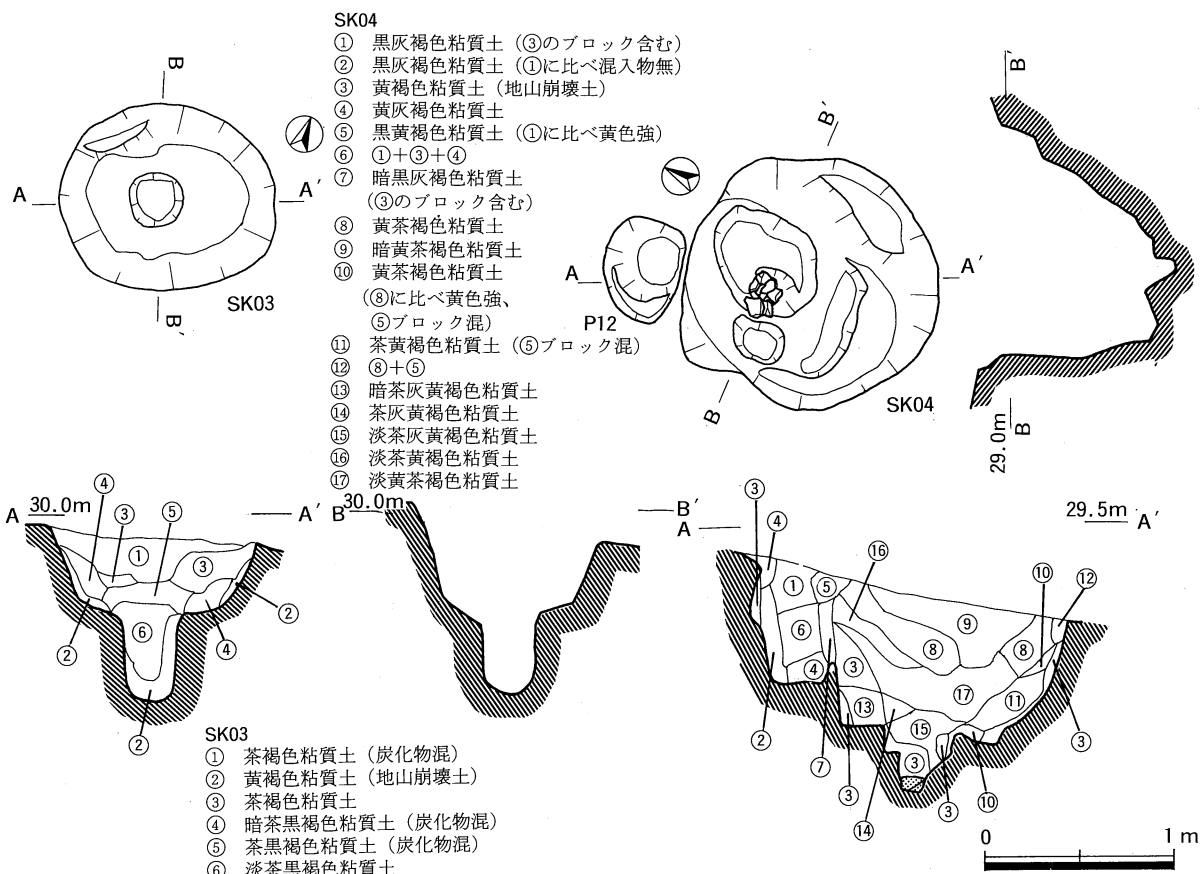


図12 SK03・04遺構図

**SK07** (挿図13 図版5)

位置 調査区中央、S I 02とS I 03の中間、標高29.3mに位置する。

形態 隅丸長方形で、残存規模は検出面で長辺1.40m、短辺0.95m、深さ0.82m、底面で長辺1.05m、短辺0.70mである。底面に直径0.35m、深さ0.55mの底面ピットがある。

土層 埋土は、13層に分層できる。

遺物 出土しなかった。

性格 底面ピットの存在から、落とし穴と考えられる。

時期 土坑の形態から縄文時代中期から後期の落とし穴と考えられる。

**SK08・09** (挿図12 図版5)

位置 SK08は調査区中央部、標高28.7mに位置する。SK09は調査区中央部、標高27.7mに位置する。

形態 長楕円形で残存規模は検出面でSK08が長辺1.40m、短辺1.10m、深さ0.66m、SK09は長辺1.70m、短辺0.90m、深さ0.35mである。SK08・09とも底面ピットは検出されなかった。

土層 SK08の埋土は、18層に、SK09の埋土は、10層に分層できる。

遺物 出土しなかった。

性格 土坑の形態から落とし穴と考えられる。

時期 土坑の形態から縄文時代中期から後期と考えられる。

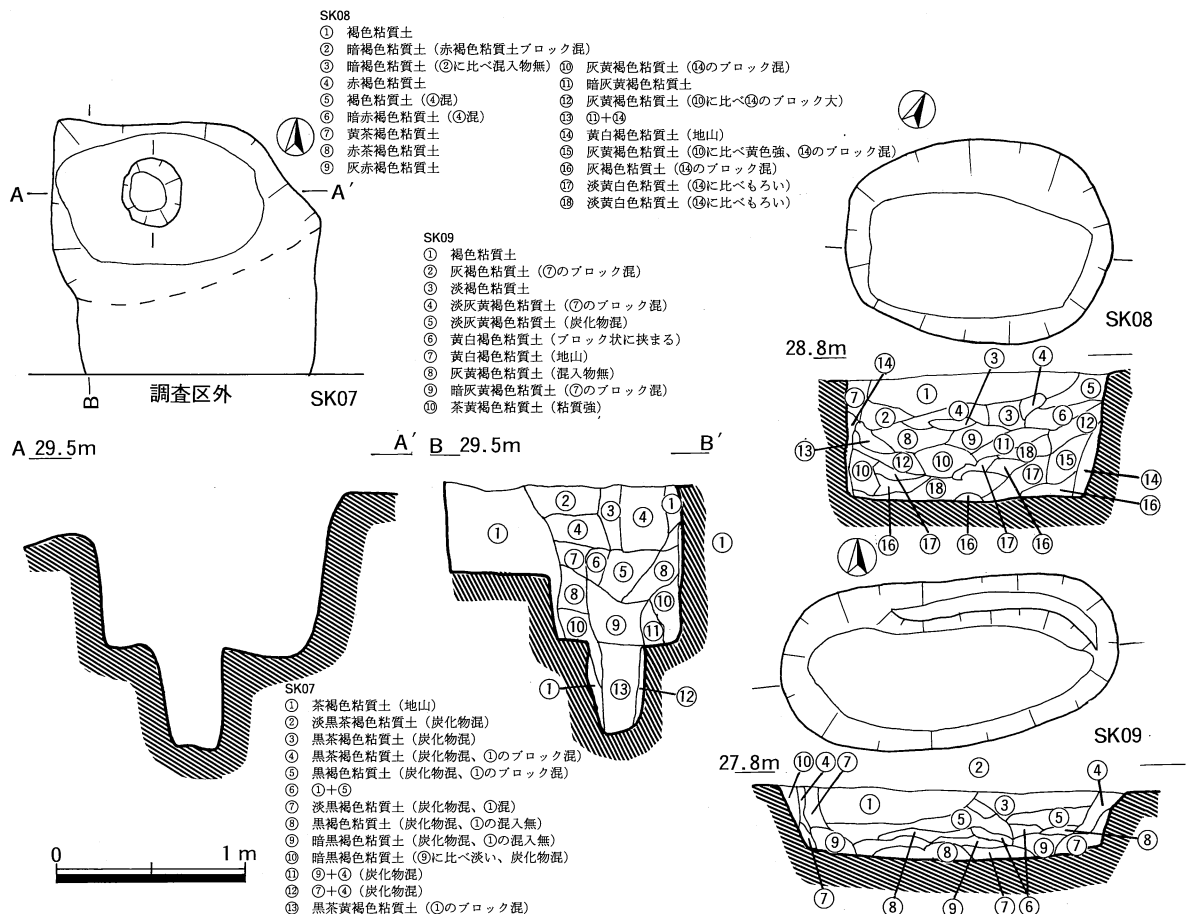


図13 SK07・08・09遺構図

**SK10** (挿図14 図版6)

位置 調査区北西、標高33.6mに位置し、SS02と重複する。

形態 長楕円形で、残存規模は検出面で長辺1.40m、短辺1.00m、深さ1.35m、底面で長辺1.30m、短辺0.57mである。底面に直径0.20m、深さ0.25mの底面ピットがある。

土層 埋土は、14層に分層できる。

遺物 出土しなかった。

性格 底面ピットの存在から、落とし穴と考えられる。

時期 土坑の形態から縄文時代中期から後期と考えられる。

**SK14** (挿図14 図版6)

位置 調査区東端、標高26.3mに位置する。

形態 隅丸長方形で、残存規模は検出面で長辺1.40m、短辺0.87m、深さ0.55m、底面で長辺0.95m、短辺0.56mである。底面に直径0.24m、深さ0.43mの底面ピットがある。

遺物 出土しなかった。

性格 底面ピットの存在から、落とし穴と考えられる。

時期 土坑の形態から縄文時代中期から後期と考えられる。

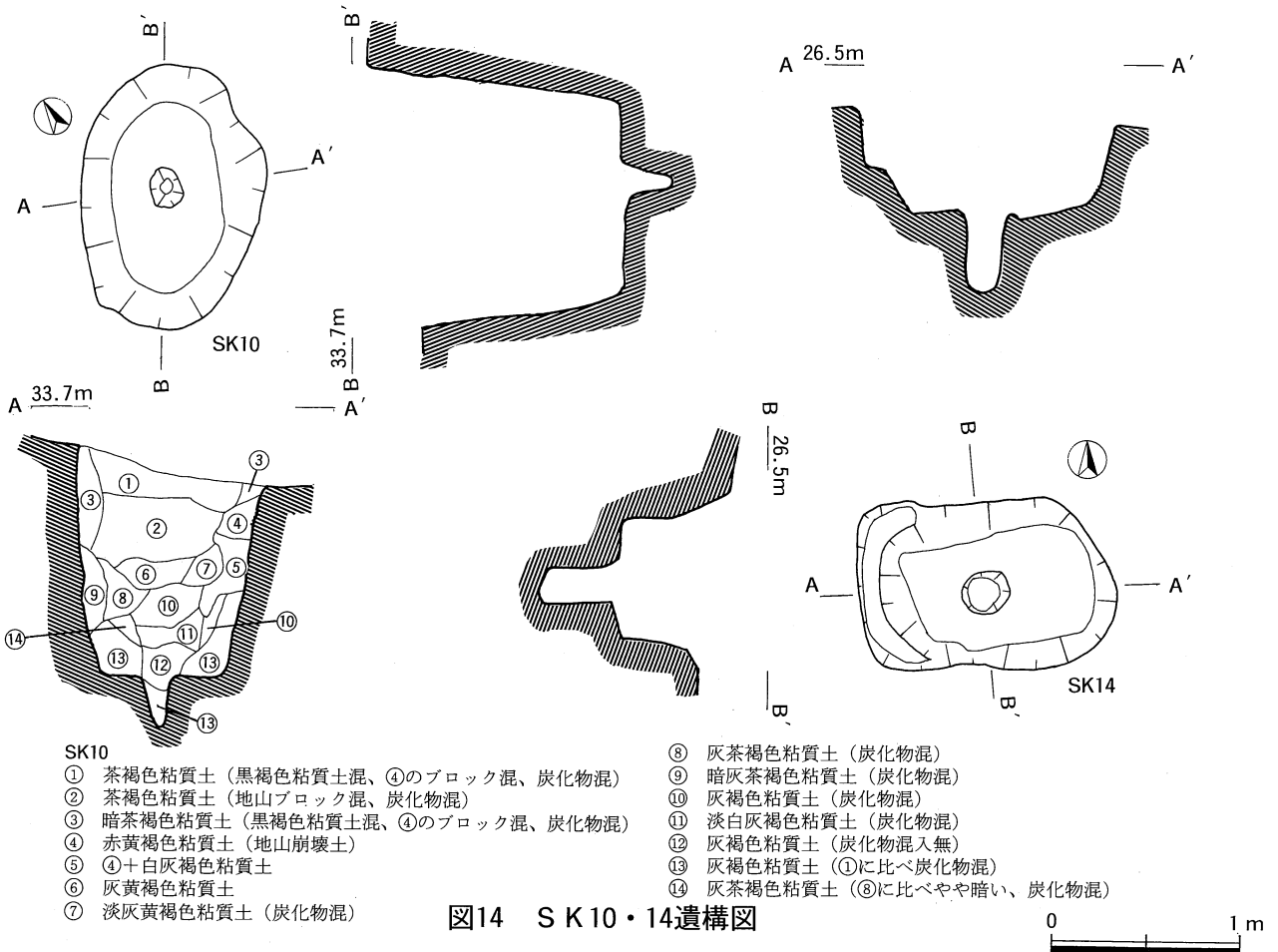


図14 SK10・14遺構図

### 第3節 その他の土坑（SK）

#### SK5・6（挿図15）

位置 SK05は調査区中央部、標高29.3mに位置する。SK06は調査区中央部、標高30.1mに位置する。

形態 両方とも円形で、残存規模は検出面でSK05が直径0.75m、深さ0.18m、SK06が直径1.07m、深さ0.30mである。SK05には壁面に焼土の塊が付着している。SK05、SK06とも肩部から底面にかけてスリ鉢状に窪む。

土層 SK05の埋土は、黄色系が2層、黒灰色系が3層で、SK06の埋土は、黄色系が1層、黒灰色系が5層である。いずれも炭化物、焼土粒を含む。

遺物 SK06より焼けた礫粒が出土した。

性格 焼土壁と焼土を含む埋土より焼土坑と考えられる。

時期 不明である。

#### SK11（挿図15）

位置 調査区東部、標高27.5mに位置する。

形態 楕円形で残存規模は検出面で直径2.05m、深さ0.20mである。

土層 5層に分層できる。①、②にビニール袋が交じる。

遺物 江戸時代後期の伊万里（Po13）が出土した。

性格 不明であるが、土層からみて現代の攪乱であると考えられる。遺物は、攪乱時に流入したと考えられる。

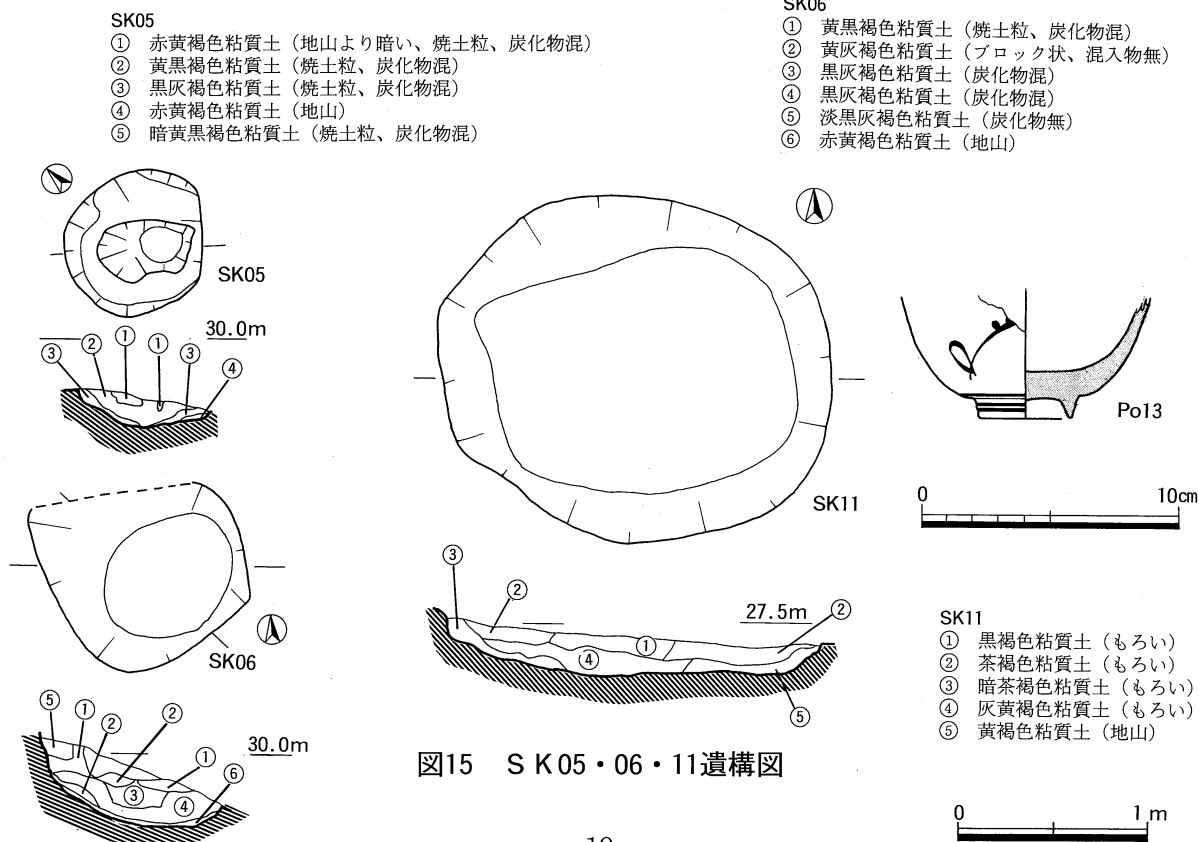


図15 SK05・06・11遺構図

## 第4節 段状遺構（SS）（挿図16 図版6）

調査区の北部から段状遺構SS01、SS02を検出した。SS01は調査区北東部、標高31.7mに位置する。残存規模は、東西約3.40m以上、南北約2.50mである。東側は調査区外である。SS02は調査区北部、標高33.5mに位置する。残存規模は東西約3.50m以上、南北約0.75mである。西側は調査区外である。南側は流出したと考えられる。両方とも等高線に沿って東西に延びているので意図的に平坦面を確保したものと考えられる。

SS01は、溝状遺構SD01・02、SK12・13、ピット7基を伴う。埋土中より弥生土器、土師器、須恵器、須恵質土器が出土したが、流れ込みのものなので時期は不明である。

SS02は、ピット5基を伴いSK10と重複する。遺物はPo27が出土した。時期的には古墳時代前期から中期と考えられる。

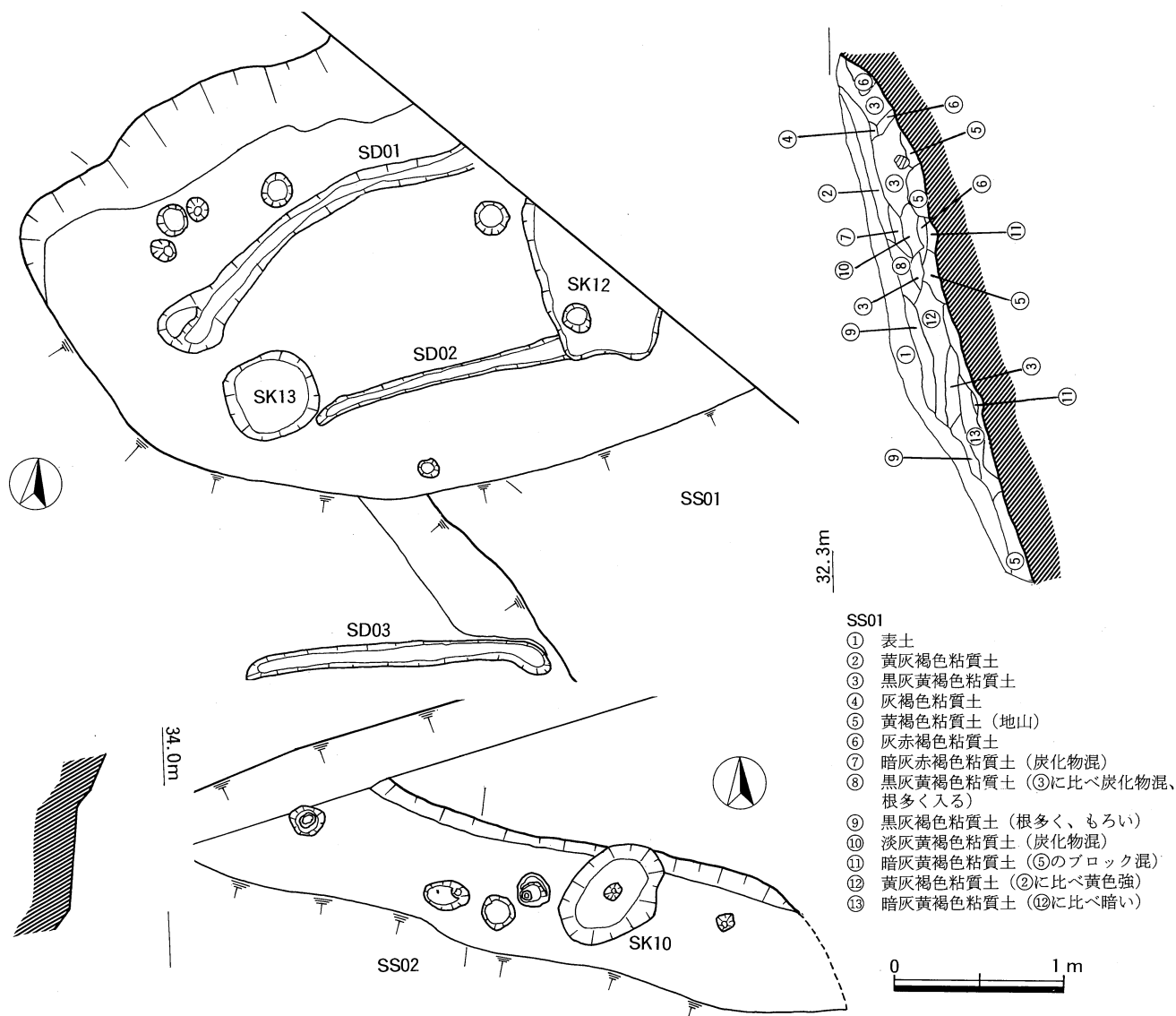


図16 SS01・02遺構図

## 第5節 掘立柱建物跡 (SB) (挿図17)

今回の調査では3棟確認できた。全て、ピット内より遺物が出土せず時期は不明である。SB01は調査区東部、標高27.5mに位置する。南東半分は調査区外になる。SB02と重複する。桁行2間、梁行1間と考えられ、柱穴間は1.90~2.30mを測る。主軸はN-83°-Eである。SB02は調査区東部、標高27.5mに位置する。南東半分は調査区外になる。SB01と重複するが、新旧関係は不明である。桁行2間、梁行1間と考えられ、柱穴間は1.40~2.10mを測る。主軸はN-83°-Eである。SB03は調査区中央部、標高28.4mに位置する。桁行2間、梁行1間で、柱穴間は1.40~2.80mを測る。主軸はN-85°-Eである。

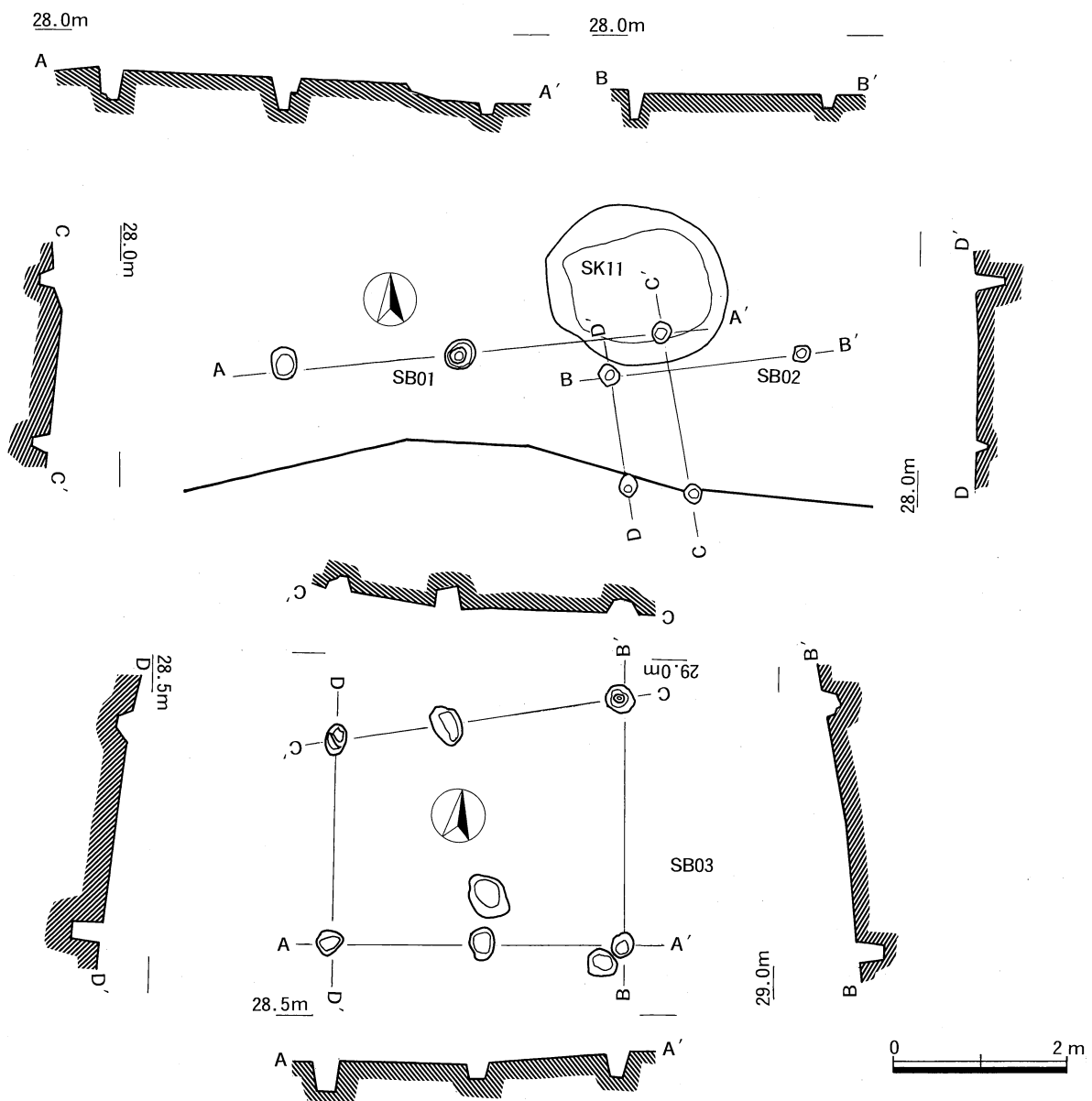


図17 SB01・02・03遺構図

## 遺物について (挿図18 図版7)

遺物は取り上げ件数にて、238点、コンテナ数で約15箱を数えた。S I 0 1 内で24点、S I 0 2 内で40点、S I 0 3 内で13点、S I 0 4 内で5点、S S 0 1 内で32点、S S 0 2 内で10点である。ここでは、遺構外より出土した遺物について報告する。

### 弥生土器

弥生土器には、壺、甕、高坏、器台がみられた。(Po14)は壺で、青木Ⅰ期に相当する。口縁は大きく逆ハ字状に開き、端部は横にほぼ並行に引き出される。(Po15)も口縁は大きくハ字状に開き、端部は横にほぼ並行に引き出される。3条の凹線が施される。青木Ⅱ期に相当する。(Po16)から(Po20)は甕で口縁部をくりあげている。青木Ⅰ期に相当する。(Po19)、(Po20)は口縁部から端部の拡張率が(Po16)～(Po18)に比べ大きい、やや内湾して立上る。青木Ⅱ期に相当する。(Po21)、(Po22)、(Po23)は、口縁部から端部までやや外反して立上る。(Po21)には3条の凹線、(Po22)には沈線、(Po23)には櫛書による平行沈線施される。青木Ⅲ期に相当する。(Po24)、(Po25)は壺か甕の底部である。(Po24)は内面に指圧痕がみられる。(Po25)は外面へラ削りが施されている。

### 分銅型土製品

(Po29)は、現存幅6.7(復元12.6)×縦長6.0—厚さ1.6cmである。周縁部に櫛による刺突文がみられる。頭頂部に裏面から抜ける貫孔はみられない。茶褐色を呈し、胎土は緻密、焼成も良好である。形態・胎土等から弥生時代中期末と考えられる。

### 土師器

青木Ⅳ期以降を土師器とする。甕、壺、口縁、底部、高坏、脚部、竈がみられた。(Po26)、(Po27)は甕口縁である。(Po26)の口縁はやや外反して立上り、端部は内側に肥厚する。(Po27)の口縁ほぼまっすぐに立上り、端部は細くおさまる。青木Ⅶ期に相当する。(Po28)は甕で、口縁は逆ハ字状に開き、端部はつまみ出してやや細くなる。外面にはハケ目が、内面には横ナデがみられる。青木Ⅹ期に相当する。小型丸底壺(Po30)は、口縁が逆ハ字状に開く。口縁径と体部径はほぼ等しい。青木Ⅷ期に相当する。

### 須恵器

須恵器には坏、甕がある。

(Po31)は、甕口縁である。逆ハ字に開き、稜のある突帯で区画され、波状紋がみられる。陶邑TK208に相当する。(Po32)は坏身で、立上りはやや内傾し、端部はシャープである。TK23～47並行期、陰田Ⅰ期に相当する。(Po33)は高台を有する坏身である。底部には糸切がみられる。陰田Ⅹ期に相当する。



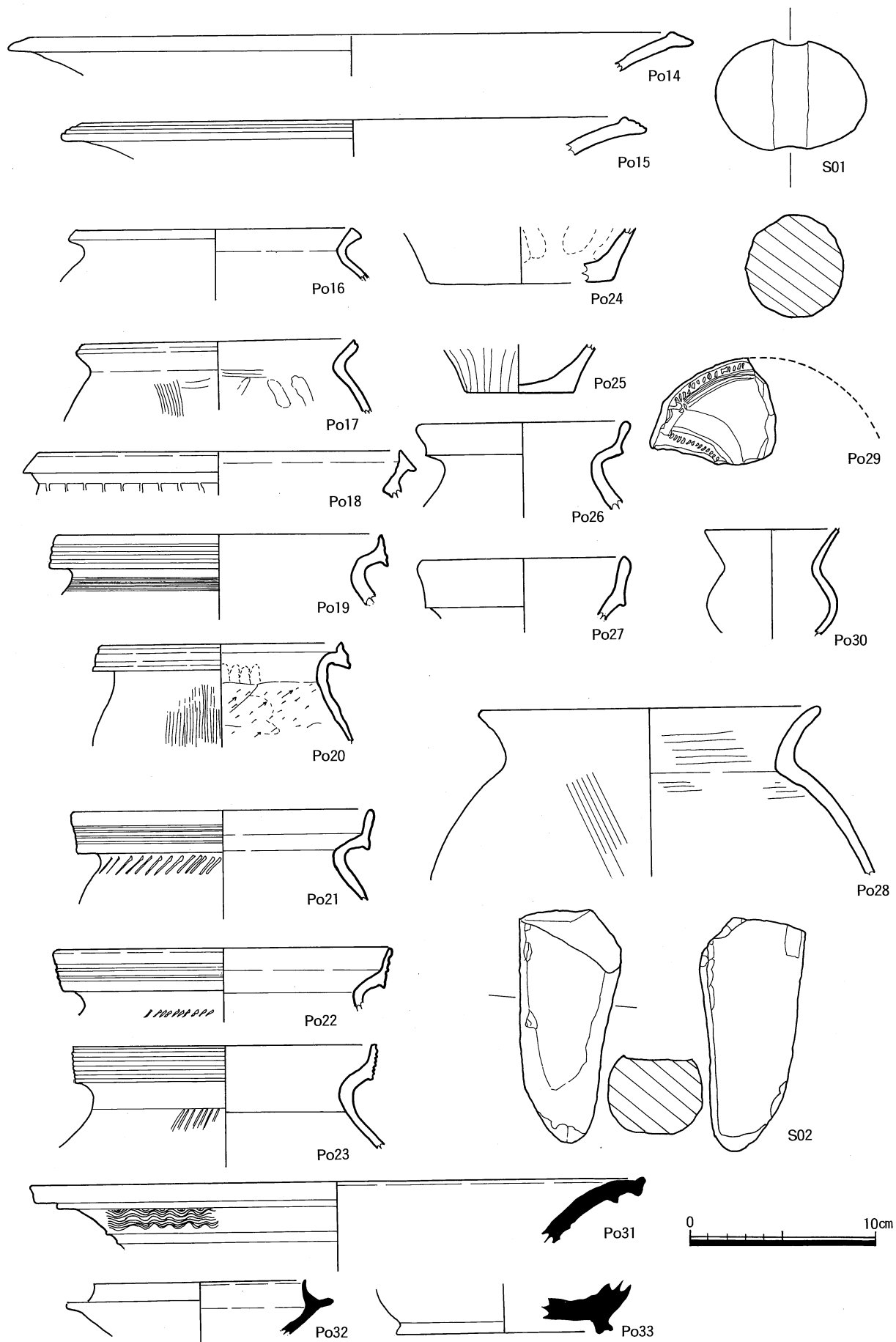


图18 出土遺物実測図

## 石器

(S01)は石錘である。体部を削り、両端部を磨いている。(S02)は、石斧である。磨製で、刃部は欠損して胴部に剝離痕がみられる。

この他図を掲載していないが、今回の調査で砥石、石斧、石錘を33点取り上げた。

## ま と め

今回の調査で、竪穴住居4基、土坑15基、掘立柱建物3基、ピット89基を確認した。時期決定可能な遺構は竪穴住居4基と落とし穴7基である。

この遺跡で人間活動の始まるのは縄文時代中期である。その時期の遺構はSK01・02・03・04・07・08・09・10・14である。これらの落とし穴をグループ分けすると、SK01とSK02、SK03と04、SK10とSK08という組み合わせが考えられる。調査区中央部の谷に向けて獣道上に配置していて、谷に向かい追い落とす狩猟法を行っていたことが推測される。

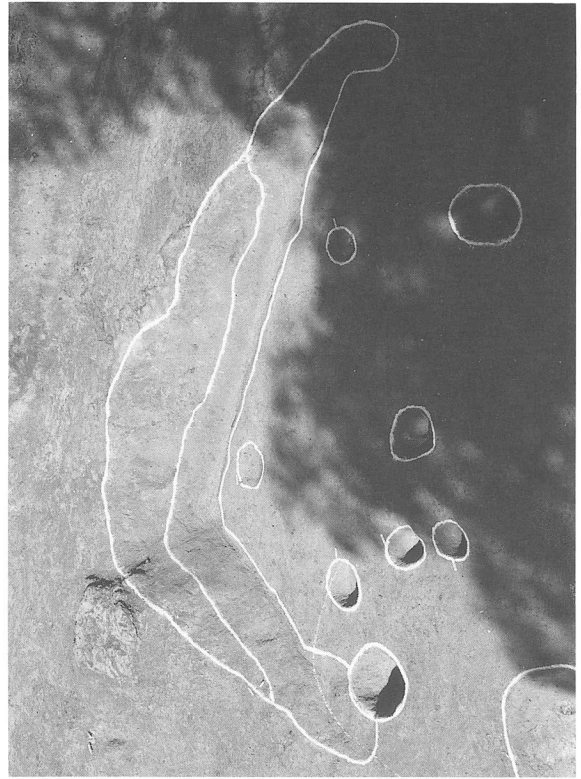
山田遺跡2区では、弥生時代中期後葉以降、集落が形成され始める。調査区内でも、SI02が建てられ、古墳時代中期にかけて、SI01、SI03、SI04も建てられる。

古墳時代中期になると、山田遺跡3区の丘陵上には古墳が築造され始めるようになるが、山田遺跡2区の丘陵上は、集落としての利用が続く。1区の流路には水利管理施設と、古墳群と集落の中間に位置することから、祭祀関係の施設が造られるようになり、墓域、生と死の空間の死中間域、生活域と土地利用の分域化がみられるようになる。調査区域は、2区に隣接し、その丘陵の延長上に位置している。SI01、SI03、SI04は、この区域が集落として利用されたことを示している。そして古墳時代後期前葉に山田遺跡の集落は廃絶するが、調査区内もそれに伴い廃絶したと考えられる。

山田遺跡から約250m南に、加茂川に並行して県道米子広瀬線が通る。このルートは、古代山陰道の候補地の一つに挙がる古くから利用されていた交通路である。山田遺跡では分銅型土製品が、今回の調査で出土した分を含め3例出土している。そして陶邑産と考えられる須恵器も出土している。これらより、山田遺跡の集落は、このルートを通じて近隣だけにとどまらず、吉備、畿内とも交流を持っていたと考えられる。



調査地全景 (北西より)



S101 (南東より)



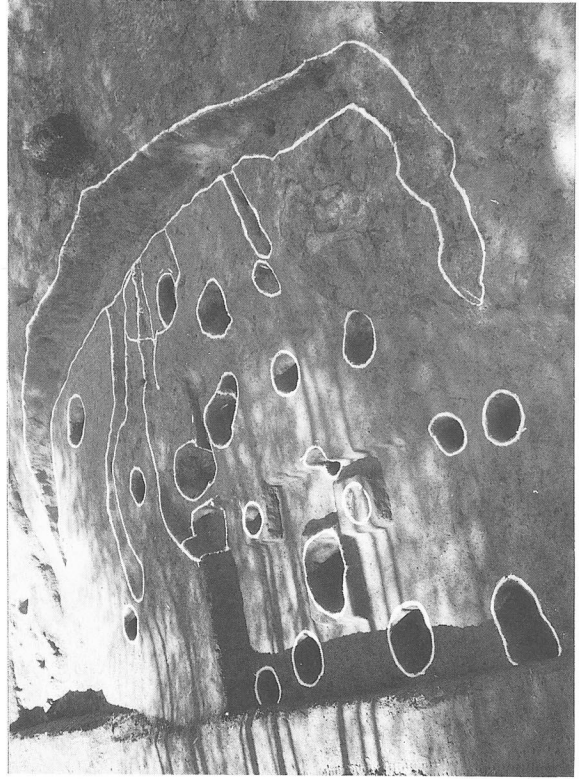
調査地全景 (東より)



S101 断面 (西より)



SX02 遺物出土状況 (Po.04)



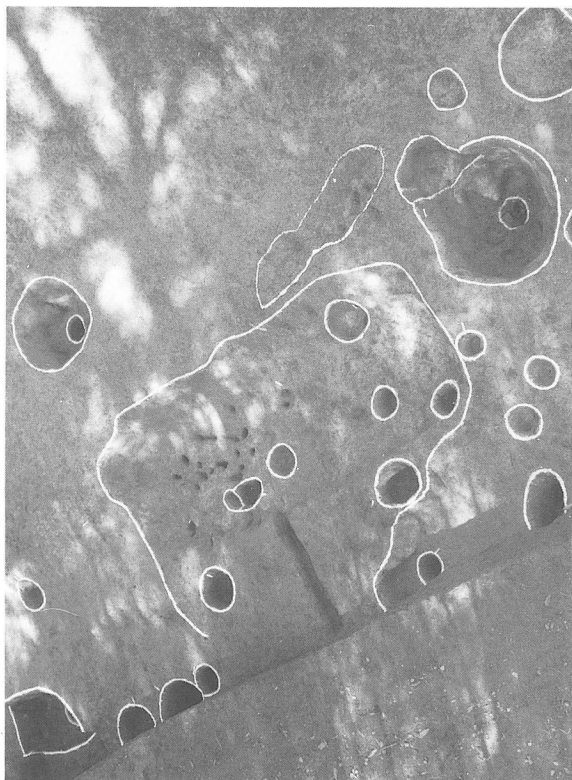
S102 (南東より)



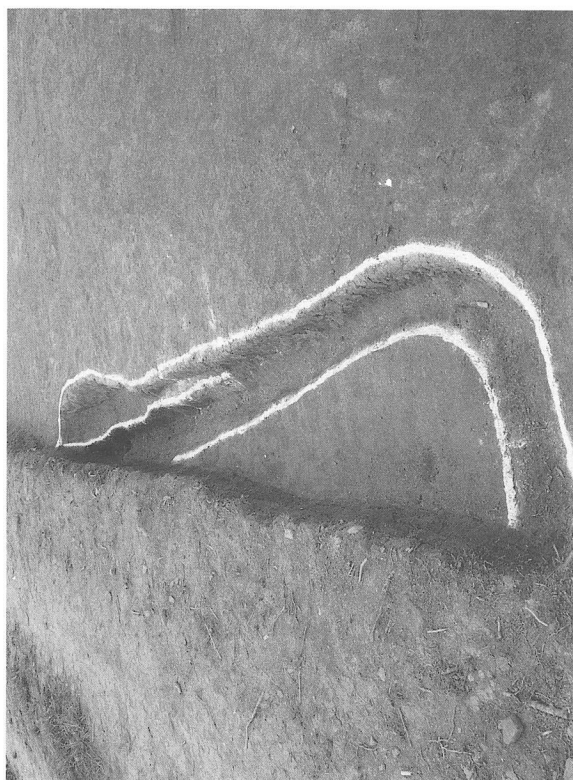
S102 断面 (西より)



SX02



S103 (南東より)



S104 (東より)



S103 断面 (南西より)



S104 断面 (北東より)

図版 4



SK01 (南東より)



SK03 (南東より)



SK01 断面 (東より)



SK02 (南より)



SK07 断面 (東より)



SK09 (南東より)

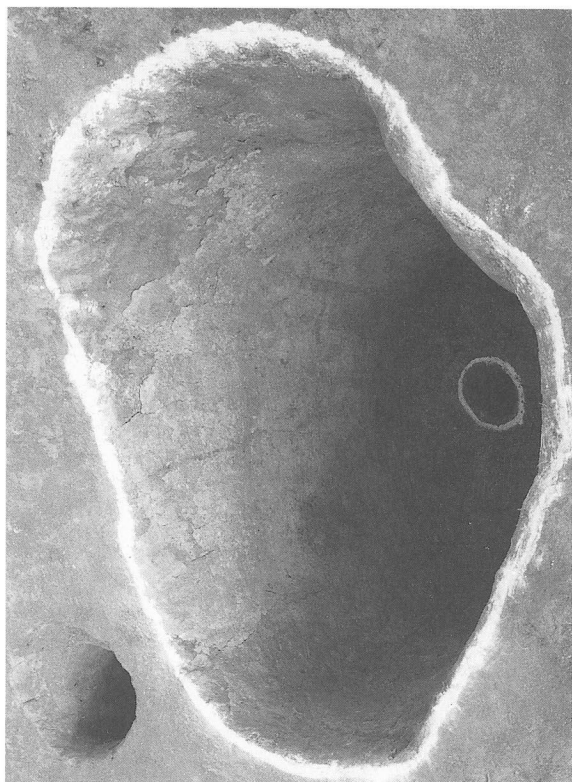


SK04 断面 (西より)



SK08 (南より)

図版 6



SK10 (東より)



SS01 (西より)

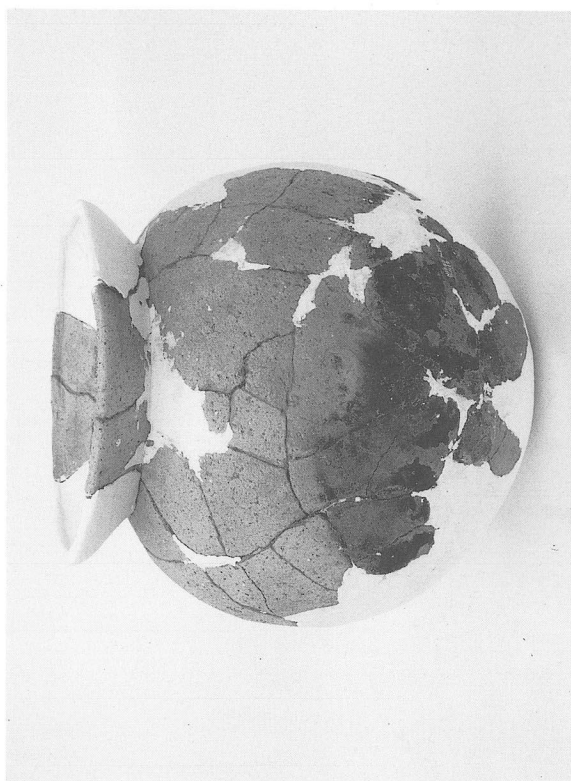


SK10 断面 (南西より)



SK14 (北より)





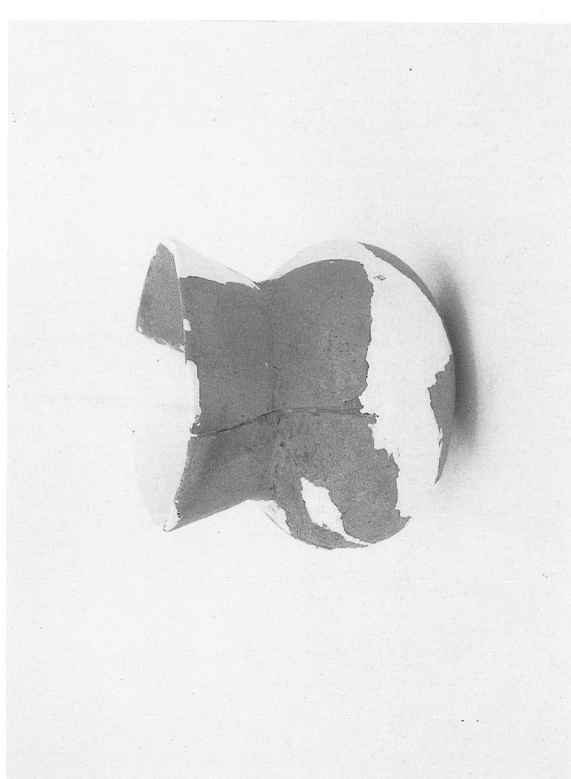
Po.06 (土師器、甕)



Po.28 (分銅型土製品)



Po.02 (土師器、甕)



Po.29 (小型丸底甕)



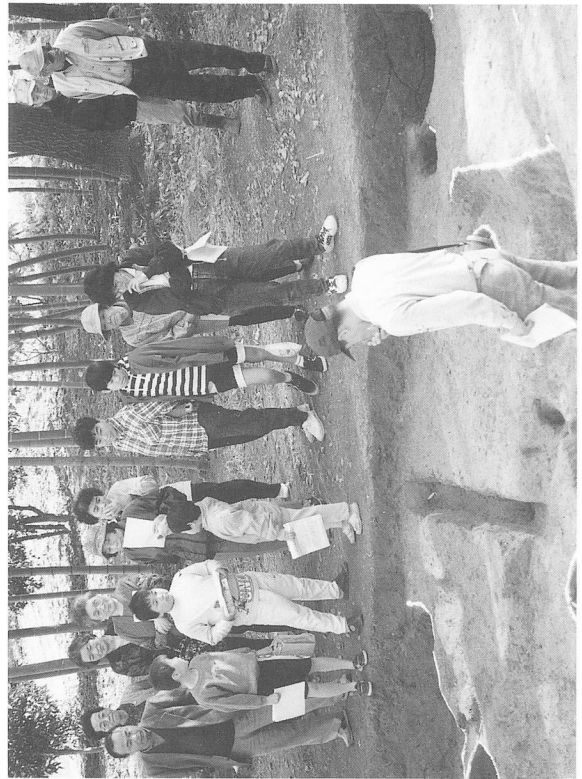
作業風景①



作業風景②



調査参加者



現地説明会

# 報告書抄録

フリガナ	ニイヤマヤマダイセキ (6ク)							
書名	新山山田遺跡 (6区)							
副書名	一般国道180号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報							
巻次								
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	19							
編著者名	深田 洋史							
編集機関	(財)米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683 鳥取県米子市中町20番地 TEL 0859-22-7209							
発行年月日	西暦 1996年3月29日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。' "	。' "		m <sup>2</sup>	
ニイヤマヤマダ 新山山田	トットリケンヨナゴ シニヤマ 鳥取県米子市新山 285番地	31202	602	35°23'40"	133°19'45"	19950825 ～ 19951124	1,200	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
新山山田	狩場	縄文時代		落とし穴 9基				
	集落跡	弥生時代後期 ～古墳時代中期		竪穴住居跡 4基 掘立柱建物 3基 段状遺構 2基 焼土坑 2基		弥生土器 分銅型土製品 石器 土師器 須恵器 陶磁器		

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書19  
一般国道180号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報  
新山山田遺跡 (6区)

発行 1996年3月

発行者 財団法人 米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室  
〒683 鳥取県米子市中町20 TEL0859-22-7209

印刷 (有)米子プリント社

〒683 鳥取県米子市旗ヶ崎2218 TEL0859-22-2155